

「アラベスクに私は何を感じるのか」

森下 佳奈実

世界の歴史を学び資料集等を眺めていると他の国々と醸し出す雰囲気が明らかに異なる建築が並ぶ地域が目に入る。イスラームである。もちろん、どの地域にも豪華絢爛な建物は存在する。日本や欧州の城、サクラダファミリア、タージマハルなどが挙げられるが、どの建物も色彩は統一されている。しかし、イスラームの建物は他とは一味異なり、カラフルである。このカラフルな文様をアラベスクと呼ぶことを知り、私はアラベスクとは何か、なぜアラベスクを用いているのかについて知りたいと考えた。

イスラム教は偶像崇拝が禁じられており、人間や動物の表現も禁じられている。そのため、幾何学文様、植物文様、文字文様を中心として無限連続文様であるアラベスクが発達した。アラベスクは、モスクなどの建築装飾だけでなく、金属細工やガラス、写本の装飾などあらゆるイスラーム美術作品に用いられている。特にモスクはイスラム教徒が神に対して礼拝をおこなう場所であり、信者がモスクに描かれた動物や人物を神とみなして崇拝するのを避けるため、アラベスク文様などの装飾が生まれ、発展していった。

幾何学文様は直線や曲線を組み合わせることで表現される。綿密に計算された無限の空間は、神が創造した完璧な世界を暗示するとされている。

植物文様はアラベスクを代表するデザインであり、植物文様のみをアラベスクと表現する場合もある。人物、動物表現を回避するため、植物モチーフが多用されることとなった。建物壁面の大きな空間を満たすため、複雑に絡み合い、連続性のある蔓草デザインが有名である。現実・非現実の植物が混在するモチーフなど、イスラームの楽園思想に関連付けられたものが多い。この文様はシルクロードを渡り、日本にも影響を与えた。現代でも風呂敷文様の定番として用いられている唐草文様の原点はアラベスクであると言われている。

文字文様は宗教建築にコーランの引用などアラビア文字を図案化して配置しているものである。必ずしも読むことを前提にしておらず、装飾の一部として幾何学文様や植物文様と組み合わせて用いられている。

このように、アラベスクは神への礼拝の場であるモスクに積極的に使われていることがわかった。神への礼拝の場がモスクであるとすれば、偶像礼拝が禁じられているモスクの中で人々は何に礼拝しているのだろうか。

モスクには仏像やなにか象徴になるものは存在していない。イスラム教の唯一神はアッラーであり、預言者ムハンマドが生まれた場所がメッカである。イスラム教徒たちは、一日5回、メッカのカアバ神殿の方角に向かって礼拝を行う。モスクにはミフラーブと呼ばれる窪みがあり、それがメッカの方角を示している。アラベスクで装飾されたモスクの中で神に向かい礼拝をする。アラベスク文様は終わりが無い繰り返しの文様であり、無限の宇宙を表すとされている。モスクの空間やアラベスク文様がその空虚を通じて神の存在感覚を伝える役割を果たしているのだ。モスクで礼拝することにより、神が作り出した世界と一体化したような感覚を味わえるようだ。様々なアラベスクを生み出すことにより、イスラームの芸術がほかの国々とは異なる独自の文化を創り出していったのである。

私はモスクの中に神を思わせるものが存在していないことに驚いたし、あのカラフルなアラベスクが美しいデザインとして存在しているだけではでなく、意味のある装飾であることを知り感銘を覚えた。そして、モスクで礼拝することによって感じる感覚は、私たちが近所の神社にお参りする時に感じるものとどこか似通っているのではな

いかと思った。

日本における神道とは、日本人の暮らしの中から生まれた信仰である。日本では海や山、木や石など様々なものに神が宿るとされ、こうした神々をお祀りする場所が神社である。神社には神鏡が置かれているが、神鏡の起源をたどると、太陽神である天照大神に行き着く。神鏡には、神様の依代としての役割の他に、私たち自身の心の姿を映し出すという意味があるとされている。

モスクの中で神を感じながら礼拝することと、神社で神鏡に向かいお参りすることは互いの精神に通じるところがあるのではないか。私たちは神鏡を神そのものだと感じているわけではない。神鏡の先に在る神様に向けてお参りをしている。これは、礼拝の方角を示すミフラーブに通じる感覚だと思う。唯一神に対し、森羅万象全てに神が宿るとする点は異なるが、モスクの空虚から神を感じるということと、神社全体に広がる静けさの中に神を感じるころは通じるものがあると感じられた。

日本にもモスクが全国に百か所以上あるそう。見学可能なモスクを訪れ、荘厳なアラベスクに囲まれ、私がそこから何を感じるかを知りたいと思った。

【参考文献】

梶屋友子『すぐわかるイスラームの美術 - 建築・写本芸術・工芸』、東京美術、2009年

杉田英明『事物の声 絵画の詩 -アラブ・ペルシア文学とイスラム美術』平凡社、1993年

前田耕作 監修『増補新装カラー版 東洋美術史』、美術出版社、2012年

辻惟雄 監修『増補新装カラー版 日本美術史』、美術出版社、2003年

池上英洋『いちばん親切的な西洋美術史』、新星出版社、2016年